

低下が止まらない学生のメディアへの接触・信頼度

—岡山理科大学生における 04 年度継続調査から—

木村 邦彦

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科
(2004年9月27日受付、2004年11月5日受理)

1. はじめに

メディアの役割に「事実の伝達と権力の監視」がある。為政者が権力を振りかざして暴走しないために、チェック機能を働かせて牽制し、市民に考える材料を提供する。メディアの中でもその中心的な役割は、新聞などの「活字メディア」が担ってきたのだが、いつの間にか市民の側から活字に背を向けるようになり、最近では「活字離れ」はますます顕著になって定着し始めている感さえある。「活字メディア」に背を向ける行動は為政者に物申さない風潮を醸し出す恐れがあり、すでに選挙における投票率の低迷などにその一端を見せている。この風潮が将来において危険な兆候をはらんでいることは、これまでの歴史が示しているとおりである。マスメディアを研究している私たちにいま必要なのは、この危険な兆候を若い人たちに知ってもらうことであり、それとともに、「活字メディアの大切さと役割」を若い人たちに認識してもらうことであろう。

実態を把握するために 2001 年度から 2 年間、講師をしていた京都市内の私立大で調査、昨年度は岡山理科大学の教壇に立つことになったのを好機として同学生にアンケートを実施した。3 年間のまとめは昨年度の岡山理科大学紀要で発表したが、調査は続行しており、今年度の続報をまとめた。今年度は同時に、書籍への接触・読書状況をも調査、「活字離れ」の状況を幅広く捉えてみた。

昨年度の岡山理科大学生の新聞読書調査においては、日本新聞協会が行っている読書調査や京都の私立大生に比べて大幅な落ち込みが見られたが、今年度の調査では、それをさらに下回る結果が出ている。読書に関しても 1 年間に 1 冊も読まない学生がかなり見られ、「活字離れ」の深刻さを垣間見せている。今年度の調査対象となった学生には新入生が大半を占めていたために「受験で書籍も新聞も読む時間がなかった」といういい訳もありそうだが、読書時間を前年度と比較した設問では過半数の学生が「変わらない」としていることなどを考慮してみると、「活字離れ」がさらに進んでいることを示したものといっても過言ではなさそうだ。

ところで、この「活字メディア離れ」という現象は、学生たちには、日常での出来事に関して深く考えず、また現状を安易に追認する姿勢として表れている。「活字離れ」の結果は、レポートにおける誤字・脱字に表れてきている。また、誤字・脱字を避けるために漢字の代わりにこれまた安易に平仮名を多用する傾向が見られるようになっている。

2. 調査対象

調査は新聞読書調査、読書調査ともに、私の「情報社会論」と「マスメディア論」を受講していた学生を対象にした。新聞読書調査の回答は 244 人、内訳は総合情報学部 106 人、理学部 102 人、工学部 36 人となっている。うち今年度の入学生は 79.1%にあたる 193 人で、あとは 2003 年度入学 21 人、02 年度 25 人、01 年度 4 人、99 年度 1 人となっている。調査は昨年度と同様、5 月の連休明けに行い、同時にテレビ、ラジオの視聴状況についても探った。

昨年度も「情報社会論」と「マスメディア論」の受講学生を対象にしていたが、「マスメディア論」は同僚教官の協力を得て調査を行ったために対象学生は、やや新入生が多かったもののさほど偏ったものとはいえず上級学年も適宜にばらつきがあった。

新聞は昨年度と同様、一般紙を対象として扱い、スポーツ紙や業界紙は除外した。

読書調査の回答は 229 人、内訳は総合情報学部 99 人、理学部 95 人、工学部 35 人で、うち今年度の入学生は 78.2% の 179 人、03 年度 17 人、02 年度 23 人、01 年度 8 人、00 年度 1 人、99 年度 1 人となっている。調査は 6 月下旬に行った。

3. 新聞閲読調査

日本でテレビ放送が始まったのは 1953 年である。この年 NHK に続いて民間放送も始まった。ラジオ放送は 25 年に始まったが 51 年に民間放送が流されるまでは今の NHK (50 年まで社団法人日本放送協会) の公共放送局 1 局だった。テレビの登場でメディアの役割に徐々に変化が生まれてきたが、それまではメディアの中核を担ってきたのは新聞と書籍である。なかでも 1870 年に初めて日刊紙が登場した新聞は、政府の言論統制、弾圧と戦いながらも世論形成に推進役を果たしてきており、市民もその役割を認めてきたように思われる。

テレビは当初、娯楽性に軸足を置いてのスタートだったが、普及化が進んだ 60 年代末ごろから報道番組の強化策がとられるようになる。それでも 70 年代にはまだ市民は新聞に「事実の伝達と権力の監視」という役割を託していた。状況が変化してくるのは、90 年代に入りテレビが本格的にニュース・報道部門の強化策を図る辺りからである。テレビはこの間にカラーの時代に入り、またそれとともに映像が持つ強さを市民の目に焼付けた。同時にまたテレビは「家族で 1 台」から「一人で 1 台」の時代に入る。「新聞や書籍を読まなくても時代に乗り遅れない」、「娯楽とともにニュースもテレビ」の風潮が広がり、「活字離れ」が進行する大きな一因にもなった。テレビは往々にして現象のみを追いかけるのだが、“総中流時代” となって大きな変化を望まない市民に、「現状に妥協し、現状を追認する」傾向が受け入れられた。同時に、新聞をはじめとする「活字メディア」が得意とする出来事の背景説明や解説などは、日常の生活では必ずしも必要なものとして考えない風潮が醸し出されてきた。

学生たちの意識も同じである。一つのテーマで討論をする時、現在ある事柄は肯定した上で参加する。「なぜそうなったのか」などの経過は、論議の中に入ってこない。現象を批判的に見ていくということはない。苦手ともいえよう。60 年代から 70 年代にかけては特に、若い人たち、なかでも学生層は、自らの将来のために時代を批判的に見る最先端に立った。その後そのエネルギーは次第に希薄となり、いまは批判的な目を養うべき「活字メディア」に背を向けている。

新聞協会が 1979 年から実施している「全国新聞信頼度調査」などが示すように、新聞閲読時間は 80 年代から 90 年代末ごろまでは平均で 40~30 分台を上下していた。調査方法を変えた 01 年の「第 2 回新聞の評価に関する読者調査」における読者ベースでのデータでは平均で 27.7 分となっており、03 年の「全国メディア接触・評価調査」でも 26.2 分となっている。20 歳台平均では、読者ベースで 01 年が 17.0 分、03 年は 17.8 分、若い人たちの低下が目立っており、現在の気質を表している。しかし岡山理科大生の閲読時間はさらに低いのである。昨年度の調査でも浮き彫りにされたが、今年度はさらに輪をかけている。

今年度の岡山理科大生の調査では、「新聞を読まない」という学生をも含めた回答者全員を対象にした閲読時間は、全学では 9.0 分、学部別では総合情報学部 9.6 分、理学部 8.8 分、工学部 7.5 分だった。昨年度の調査では全学で 10.2 分、総合情報学部 9.9 分、理学部 11.7 分、工学部 7.2 分となっており、全学で 1 分余りの低下となり 10 分を割った (表 1)。昨年度の調査と比較した京都の私大生は 01 年の調査で 16.0 分、02 年で 20.1 分と、新聞協会調査の 20 歳代とほぼ同じ結

表 1 岡山理科大生の新聞閲読時間

	単位 分			
	全学	総合情報学部	理学部	工学部
2004 年 5 月調査 (回答 244 人)	9.0	9.6	8.8	7.5
2003 年 5 月調査 (回答 398 人)	10.2	9.9	11.7	7.2

表 2 京都の私大生、日本新聞協会調査による新聞閲読時間

京都の私大生		日本新聞協会	
2002 年調査 (回答 38 人)	2001 年調査 (回答 40 人)	2003 年 10 月調査 (回答 15-19 歳 218 人、 20 歳代 521 人)	
		15-19 歳	20 歳代
20.1	16.0	12.5	17.8

果を保っていた（表 2）。岡山理科大学生の閲読時間の少なさがいかに際だっているかが分かる。

今年度の岡山理科大学生の調査では、「新聞を全然読まない」学生は全学で 44.3%、総合情報学部 30.2%、理学部 57.8%、工学部 47.2%だった。ほぼ半数が新聞を読んでおらず、昨年度の全学 38.9%、総合情報学部 33.9%。理学部 50.4%、工学部 34.8%と比べると、微減となった総合情報学部を除いて、さらに「新聞離れ」が進んでいるといえよう。

閲読時間は、この「新聞を読まない学生」を除いた閲読ベースでも、30 分以下が全学で 92.6%を占めており、最長でも 90 分（下宿者で新聞購読している 1 人）、続いて 60 分が 2 人、40 分が 7 人となっており、平均すると全学で 16.1 分、総合情報学部 13.8 分、理学部 20.8 分、工学部 14.2 分にしかっていない。

昨年度の調査では、新聞を読まない原因についての調査項目を置かず、一因を「下宿」と推測したが、調査項目に入れた今年度の調査ではその推測が間違いなかったことが分かった。下宿者は回答者の 63.9%だったが、うち新聞を購読していない学生は 75.0%にもものぼっていた。自宅通学者では、「新聞を購読していない」と回答したのは 1 人で、ほぼ新聞に接しているように見受けられたが、実際の閲読時間は 11.9 分と少なく、12.6%は「閲読時間は 0 分」だった。

閲読時間で最長 90 分を回答したのは下宿学生である。

新聞は下宿で購読しなくても図書館などでの閲読もできる。「活字メディア」を重要と考えるかどうか、の意識の問題といえるだろう。

平均的な 32 ページの新聞を、記事も広告もお知らせもすべて織り交ぜて、単純に新書版の大きさにすると文字数から岩波新書 2.5 冊分程度の分量になる。現在は新聞の文字が大きくなったために 2 冊分余りだが、過去には 5 冊分だといわれていた。広告もお知らせもすべて織り込むのは少々乱暴だが、それでも日々優に新書 1 冊以上のものが配達されていることになる。毎日、新書 1 冊分を読むのは至難の業だろうが、10 分を切る閲読時間はどう考えても少なすぎる。10 分程度では見出しさえも十分に見ることはできない。最低 30 分は閲読して欲しい。

4. 新聞・テレビ・ラジオの接触度調査

「新聞を読まないが、ニュースは知っている」というのが、最近の学生の言い分であることは、上記で記したが昨年度の調査のまとめでも触れた。今年度でも同じような声を聞くが、「それでは」と講義中に最近のニュースをいくつかピックアップさせると不確かな回答がいくつも返ってくる。何人かは 1 件が書けない。書けたとしても、「最近 1 週間のニュース」と限定しているのに 1 ヶ月以上も前のものが数多く混じってくる。ニュースの意味や位置づけ、影響、背景などについてはまず説明できず言葉に詰まる。事件や事故、話題があったことをどこかで見たか、耳にした程度なのだ、と推測している。

「新聞に代わるニュース源」としては、最近、急速にインターネットが増えてきている。とはいえ、学生にとってはやはりテレビだそう。昨年度と同じように「新聞」、「テレビ」、「ラジオ」を対象にして接触度を調べた結果が（表 3）である。

このデータを見る限り、テレビの視聴時間は長い。今年度の全学の平均視聴時間は 155.0 分で、昨年度の 151.2 分とほぼ同じだった。「視聴時間 0 分」を除いた視聴者ベースで見ると 161.0 分になる。2 時間半に及ぶ長時間だが、新聞協会の 03 年の調査における 20 歳台平均 184.8 分と比べればさほど驚くことではないのかもしれない。

学部では、総合情報学部 147.4 分（昨年度 181.8 分）、理学部 154.2 分（同 144.3 分）、工学部 180.0 分（同 152.8 分）となっている。学部によって昨年度との変化はあるが、全体で見ると大きな変化とはいえない。

「全然見ない」という学生は全体で 3.7%と昨年度の 2.4%より少し増えたが、逆に 301 分以上も見ると言う学生も今年度は 5.9%と、昨年度の 4.4%よりも増えた。最高は 420 分（7 時間）が 3 人となっている。3 人ともに下宿者で、いずれも新聞を購読しておらず、1 人は「毎日 30 分程度は新聞を読む」と答えたものの、他の 2 人は「新聞の閲読時間は 0 分」だった。

ラジオの聴取は昨年度は 80.1%が「聴いていない」と回答、接触度は低かったが、今年度も 81.6%が「聴取時間 0 分」と回答、同じく現在の学生の日常生活にはさほど持ち込まれていないことが浮き彫りにされた。03 年の新聞協会調査では 20 歳代の「0 分」は 44.1%である。テレビが一人 1 台の時代に入って、ラジオはメディアとしての役割は弱くなりつつある。今年度の岡山理科大学生の聴取時間は全体平均で 15.2 分、昨年度の 10.8 分に比べてわずかながら増えたといえるが、傾向としては大きな変化はない。「聴いていない」

表3 メディア接触度調査

		0 分	30 分 以 下	60 分 31 分	120 分 61 分	180 分 121 分	240 分 181 分	300 分 241 分	301 分 以 上	平 均	
		(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(分)	
新聞	岡山理科大 2004年	全学	44.3	51.6	3.7	0.4	—	—	—	—	9.0
		総情学部	30.2	67.0	2.8	—	—	—	—	—	9.6
		理学部	57.8	36.3	4.9	1.0	—	—	—	—	8.8
		工学部	47.2	50.0	2.8	—	—	—	—	—	7.5
	岡山理科大 2003年	全学	38.9	57.8	3.0	0.3	—	—	—	—	10.2
		総情報部	33.9	62.2	3.4	0.4	—	—	—	—	9.9
		理学部	50.4	47.9	1.7	—	—	—	—	—	11.7
		工学部	34.8	60.9	4.3	—	—	—	—	—	7.2
	京都の私大(2002年)		36.8	44.7	15.8	2.6	—	—	—	—	20.1
	京都の私大(2001年)		35.6	52.5	10.0	—	2.5	—	—	—	16.0
テレビ	岡山理科大 2004年	全学	3.7	5.9	15.2	26.2	25.0	10.7	7.8	5.9	155.0
		総情学部	4.7	7.1	15.1	26.4	25.5	6.6	11.3	4.1	147.4
		理学部	3.9	4.9	18.6	24.5	26.5	11.8	2.9	6.9	154.2
		工学部	—	5.6	5.6	30.6	19.4	19.4	11.1	8.3	180.0
	岡山理科大 2003年	全学	2.4	9.5	13.4	26.3	25.6	11.5	6.8	4.4	151.2
		総情学部	1.6	11.0	15.1	27.8	26.1	9.0	5.3	4.1	181.8
		理学部	4.3	7.8	13.8	25.0	21.6	14.7	8.6	4.4	144.3
		工学部	2.0	6.1	4.1	22.4	32.7	16.3	10.2	6.1	152.8
	京都の私大(2002年)		5.6	—	8.3	38.9	30.6	8.3	—	—	139.7
	京都の私大(2001年)		7.3	12.2	17.1	31.7	14.6	2.4	—	14.6	117.7
ラジオ	岡山理科大 2004年	全学	81.6	7.2	4.1	4.9	2.1	—	—	0.4	15.2
		総情学部	77.4	11.2	6.6	4.7	1.0	—	—	—	13.3
		理学部	84.3	4.9	2.9	3.9	2.9	—	—	1.0	17.0
		工学部	86.1	2.8	—	8.3	2.8	—	—	—	15.8
	岡山理科大 2003年	全学	80.1	11.3	4.4	3.0	0.7	0.2	—	0.2	10.8
		総情学部	76.2	12.3	5.8	4.2	0.8	0.4	—	0.4	6.3
		理学部	89.1	6.2	2.3	1.6	0.8	—	—	—	14.1
		工学部	77.3	20.5	2.3	—	—	—	—	—	5.5
	京都の私大(2002年)		65.8	7.9	7.9	7.9	5.3	5.3	—	—	37.1
	京都の私大(2001年)		75.6	7.3	4.9	7.3	—	—	2.4	2.4	17.9

*回答は岡山理科大の2004年新聞・テレビ・ラジオはともに244人、2003年新聞398人、テレビ410人、ラジオ433人、京都の私大2002年新聞38人、テレビ36人、ラジオ38人、2001年新聞40人、テレビ39人、ラジオ41人。いずれも閲読・視聴0分を含む全回答を対象とした。

との回答を除くと、平均聴取時間は昨年度の54.3分を上回る82.4分になったが、480分にわたる長時間聴取者が今年度の数字を引き上げたようだ。03年新聞協会調査の聴取ベースでは20歳代で70.2分となっている。

以下、昨年度と同じように「新聞」、「テレビ」、「ラジオ」のジャンルごとに今年度の傾向を見ていきたい。

4-1 新聞でよく見る面(ページ)

新聞の閲読時間は短いのだが、それでも閲読する学生はどの面(ページ)を見ているのか? 昨年度は「最初に読む面」、「読む面の順位」、「毎日読む面」の3項目の質問を立てていけば「新聞の読み方」を探った結果、まず「1面」を見て、その後はほぼ「運動面」、「社会面」、「国際面」、「経済面」、「文化面」、「家庭面」、

「解説面」の順番で閲読している傾向が読みとれた。今年度は質問を「毎日よく読む面」のみに絞り、上位の3面（ページ）を書いてもらったのだが、結果は、「2,3面を含む1面」がやはり閲読傾向が高く、全体の回答の中では42.6%を占めた。次いで「運動面」、「社会面」、「地域面」、「国際面」、「経済面」、「文化・学芸面」、「家庭面」、「解説・投書面」となった。昨年度にはなかった「地域面」を選択肢に加え上位に入っているが、全体的な傾向は昨年度と変化はなかった（表4）。

表4 岡山理科大学生が毎日読む紙面

	単位 %								
	1面	国際面	経済面	社会面	スポーツ面	家庭面	文化学芸面	解説投書面	地域面
2004年 (回答136人)	76.4	27.9	18.4	39.7	58.1	10.3	14.0	7.4	36.8
2003年 (回答181人)	85.1	35.9	19.3	43.1	59.7	5.5	16.6	4.4	—

* 閲読時間0分を除き、よく読む紙面上位3ページを回答してもらい集計したが、3ページなくても回答としてカウントした。04年と03年では質問方法を少し変えたが、03年を比較のために掲載

「1面」がトップになるのは、新聞を手にした時にまず目にするのが影響していると思われるものの、昨年度も触れたように各新聞社が1面を「総合面」として制作していることも大きな要因として考えられる。新聞を発行するまでに発生した大きなニュースや関心のあるニュース、話題などを重点的に1面に載せ、さらに中面の掲載ものをインデックスで知らせるという工夫がなされている。読者は1面を見れば、ほぼその日の紙面の大雑把な内容がつかめるだけに1面を見て新聞の内容がある程度分かる。

ところで、今年度の調査では「地域面」を取り上げた。3人に1人余りの割合で興味を持たれている結果が示されたが、「地域面」はこれからの新聞の果たす役割の大きな柱の一つになる、と言われている。いま情報源としてはインターネットの割合が増えている。さらにこれから増えていくだろうが、インターネットが得意とする情報は「全国もの」である。“取り残される地域の情報”を、テレビのように見落とす可能性も強い一過性の媒体に頼るよりも、見て確認することができる新聞を利用するのだという。新聞協会の03年調査（回答3873人、複数回答）によれば、「地域や地元のことがよく分かる」は「新聞」が54.3%を占め、「テレビ（民放）」22.1%、「テレビ（NHK）」18.4%、「ラジオ」12.3%、「インターネット」10.6%を大きく引き離している。

ところで、今年度も「運動面」は相変わらず上位となっている。新聞の役割には「事実の伝達と権力の監視」だという硬派的な面に加えて「娯楽性」もある。明治時代には硬派的な「大新聞」と柔らかい記事を扱う「小新聞」があり、現在の英国や米国にはクオリティー・ペーパーとともにスクandalな記事を得意とするイエロー・ペーパーがある。芸能関係などの記事を掲載する文化面ともども読者のニーズを満たせるものとして、スポーツ紙などに限らず一般紙も最近特に力を入れているページでもある。

学部別では、工学部で「国際面」を重視、「経済面」をやや敬遠する傾向が見られたが、昨年度も同じ状況だった。

新聞協会の03年調査ではジャンル別になっているが、「テレビ番組表」、「社会・事件・事故」、「国内スポーツ」、「国内政治」、「天気予報」が上位5位である。このあと「地元・地域の出来事」、「医療・健康」と続いている。

4-2 テレビでよく見る番組

長時間見られているテレビの調査では「どの番組を見ているのだろうか」と興味をそそられる。この調査も昨年度は「最初に見る番組」、「見る番組の順位」、「毎日見る番組」の3項目を尋ねたが、今年度は「毎日よく見る番組」1項目に絞り、上位3番組をあげてもらった。全体で、昨年度は「ニュース」と「バラエティー」番組が拮抗していたもののやや「バラエティー」が上回り、その後「スポーツ」と「ドラマ」が並び、「音楽」、「映画」、「トーク」、「ワイドショー」、「ドキュメント」の順となっていたが、今年度は「ニュース」がわずかながら「バラエティー」を上回り、「スポーツ」、「音楽」、「ドラマ」が拮抗し、「映画」、「トーク」、

表 5 岡山理科大学生が毎日見るテレビ番組

	ニュース	ドキュメンタリー	トーク	スポーツ	ワイドショー	映画	ドラマ	音楽	バラエティー
2004年 (回答 235人)	64.2	11.1	23.0	41.3	10.2	25.2	35.7	38.7	58.6
2003年 (回答 330人)	50.3	8.2	20.0	34.5	12.7	24.8	38.2	35.5	50.6

*視聴時間 0 分を除き、よく見る上位 3 番組を回答してもらい集計したが、3 番組なくても回答としてカウントした。04 年と 03 年では質問方法を少し変えたが、03 年を比較のために掲載

「ドキュメンタリー」、「ワイドショー」と続いた(表 5)。全体に大きな変化はないのだが、工学部では昨年度と同じように「バラエティー」が「ニュース」を上回っていた。

昨年度も今年度も「ニュース」が上位に位置したが、この「ニュース」番組は、具体的にどの番組を指すのだろうか。学生だから、夜の番組が主流になるとすれば、午後 6 時前後の民放、7 時、9 時、10 時の NHK、11 時から 0 時にかけての民放などが考えられるが、どの番組なのだろうか？ いつも同じ番組だろうか？ テレビの前でじっくり見聞きするのだろうか？ 平均で 2 時間半をも見るというテレビ視聴の実態を探るために今後の課題としたい。

4-3 ラジオでよく聴く番組

ラジオでも、昨年度は「最初に聴く番組」、「聴く番組の順位」、「毎日聴く番組」の 3 項目を質問したが、今年度は「毎日よく聴く番組」1 項目にして、上位 3 番組を書いてもらった。昨年度は「音楽」が飛び抜けていたが、この傾向は今年度も変わらなかった。昨年度はこの後「トーク」、「バラエティー」、「スポーツ」、「ニュース」の順でほぼ大差なく、少し下がって「ドキュメンタリー」となっていたが、今年度は「トーク」と「ニュース」が「音楽」に続いて多く、少し下がって「スポーツ」、「バラエティー」となっていた。「ドキュメンタリー」の聴取者はいなかった(表 6)。

学部別では、総合情報学部で「トーク」番組の聴取者が「音楽」をわずかに上回った。

5. メディアの信頼度調査

新聞の大きな役割の一つに「事実の伝達」があることはすでに触れている。「事実」をそのままに伝えることで読者の信頼を得てきた。「客観的中立報道」を是とすることで、読者に事実も伝えて判断を読者に任せてきた一面もある。ここ 20 年ほどの間に「主観的報道」を主張する新聞も増えて記事の判断や説明を新聞社の方針の下に書いて読者をリードする、というケースもあるが、それでも根底にあるのは「事実」である。

半面、テレビには「娯楽」からスタートしたという一面があり、「事実の報道」に対しても視聴者は寛容な一面をもってきたのだが、最近の傾向としてこの考えは揺らいでいる。

表 7 岡山理科大学生が最も信頼をよせるメディア

	新聞	テレビ	ラジオ	本・雑誌	その他
2004年(回答 258人)	38.0	49.2	2.7	5.8	4.3
2003年(回答 186人)	38.2	45.2	3.7	4.3	9.7

*その他には、白紙や明確な回答が不明なものなどを含めた

02 年に京都

の私大生 40 人を対象にした「新聞の記事、テレビ・ラジオの放送内容」の信頼度調査では新聞 79.1%に対してテレビ・ラジオ 67.4%となり新聞の信頼度に軍杯が上がったのだが、昨年度の岡山理科大学生の「最も信頼できるメディア」を尋ねた調査では、新聞 38.2%、テレビ 45.2%と逆転した。今年度も新聞 38.0%に対して、テレビ 49.2%と、むしろその差は開いてきた（表 7）。この結果は、岡山理科大学生の特別な傾向でないことは、新聞協会の 03 年調査にも表れており、同調査では新聞 40.5%に対してテレビ（NHK）50.1%なのである。ただ、テレビ（民放）は 11.3%と低い。

講義における別のレポートでは、新聞の信頼度低下の原因に誤報ややらせ、記事のあいまいさなどを上げる傾向が強かったが、テレビにも相変わらずやらせや未確認情報を取り上げるケースも目立っている。テレビの接触時間は長いだけに問題が発生すれば影響も大きいはずだが、岡山理科大学生や新聞協会の調査回答者はそのようには見ていない。週刊誌などを含めてセンセーショナルに取り上げられるメディア・スクラム（集団的過熱取材）をはじめとする取材における問題なども強く印象に残り、その上で新聞に対して不信感を持ってきているようにも思える。

テレビの不祥事は新聞で見るとその内容は分かりやすいが、テレビでの報道では意外と理解しにくいものかもしれない。というのはテレビのニュースはその日の大きなニュースや話題を除けば結構細切れとなっており、じっくり見ていないと目に入らないものが多い。新聞の特徴の一つで「一覧性」があるが、テレビにはそれがなく、仮に長時間テレビをつけていても見落とす可能性は高いといえる。

表 8 新聞の信頼度調査

		そう思う	そうは思 わない	どちらと もいえず	単位 % わからな い
新聞に書いてあることは正確だというイメージがある	岡山理大生 (2004 年)	38.0	24.4	36.4	1.2
	同 (2003 年)	19.4	32.3	45.7	2.7
	京都の私大生(2002 年)	64.0	12.0	24.0	0.0
	新聞協会調査(2001 年)	52.9	25.1	18.3	3.7
新聞はいろいろな立場の意見を公平に取り上げている	岡山理大生 (2004 年)	16.7	55.4	25.6	2.3
	同 (2003 年)	10.8	63.4	22.6	3.2
	京都の私大生(2002 年)	16.0	32.0	48.0	4.0
	新聞協会調査(2001 年)	42.1	25.7	26.4	5.8
新聞報道は客観性を保っている	岡山理大生 (2004 年)	31.4	28.3	32.9	7.4
	同 (2003 年)	25.8	34.4	31.2	8.6
	京都の私大生(2002 年)	8.0	32.0	52.0	8.0
	新聞協会調査(2001 年)	44.0	21.6	25.9	8.5
新聞は事実を深く掘り下げて報道しているところに価値がある	岡山理大生 (2004 年)	41.1	25.6	24.0	9.3
	同 (2003 年)	40.9	30.1	17.2	11.8
	京都の私大生(2002 年)	68.0	4.0	20.0	8.0
	新聞協会調査(2001 年)	50.7	20.3	23.4	5.6
新聞記事は興味本位に流れず品位を保っている	岡山理大生 (2004 年)	30.2	33.3	27.1	9.3
	同 (2003 年)	16.1	34.4	36.0	13.4
	京都の私大生(2002 年)	48.0	24.0	16.0	12.0
	新聞協会調査(2001 年)	52.7	17.4	23.7	6.2
新聞は報道される人のプライバシーや人権に気を配っている	岡山理大生 (2004 年)	22.9	45.0	27.1	5.0
	同 (2003 年)	19.9	40.9	32.8	6.5
	京都の私大生(2002 年)	28.0	24.0	28.0	20.0
	新聞協会調査(2001 年)	48.4	18.9	25.6	7.0
新聞は社会の人が知るべき情報を十分に提供している	岡山理大生 (2004 年)	50.4	22.1	23.3	4.3
	同 (2003 年)	48.4	16.1	31.2	4.3
	京都の私大生(2002 年)	64.0	8.0	16.0	12.0
	新聞協会調査(2001 年)	63.0	14.4	18.6	4.0

*回答は、岡山理大生(2004 年) 258 人、同(2003 年) 186 人、京都の私大生 25 人、日本新聞協会調査 1463 人

ところで、今年度も昨年度と同じ項目で新聞の信頼度を調査したが、回答を得たのが（表 8）である。昨年度と比べて大きく変わったのが、「正確性」と「品位」である。「正確性」に関しては「そう思う」との回答が 18.6 ポイントも増えた。02 年の京都の私大生や 01 年の新聞協会の調査には及ばないが、かなりの改善となった。「そうは思わない」を見れば、昨年度の調査では 3 人に 1 人にあたる 32.3% が「正確性」に疑問符を投げかけたていたのだが、今年度の調査では 4 人に 1 人（24.4%）と減少した。新聞協会調査とほぼ同じ、いわば、この数字が現在の一般の人たちの考えを示しているのかも知れない。

「品位」も昨年度の 16.1% から 14.1 ポイント増えて 30.2% となった。京都の私大生の 48.0% や新聞協会調査の 52.7% に比べればまだまだ十分とはいえないが、それでも信頼度につながる数字となる。

また「公平性」で「そう思わない」が昨年度の 63.4% から 55.4% に少しながら減り、「そう思う」も 10.8% から 16.7% に増えたが、市民の意見の紙面への取り上げ方に、まだまだ偏りを感じている結果を示していた。

「報道の客観性」については、「そうは思わない」が昨年度の 34.4% から 28.3% に減り、逆に「そう思う」が 25.8% から 31.4% に増加して少しながらもやや好意的な見方に転じていた。

「事実を深く掘り下げた報道」は、多メディアの時代となり速報性でインターネットやテレビなどに遅れをとっている新聞の最後の「切り札」とも言うべきものだが、「そう思う」が昨年度の 40.9% から 41.1% に増加して面目を保ったようだ。「そうは思わない」も昨年度の 30.1% から 25.6% に減少してこの傾向を裏付けた。「社会の人が知るべき情報を十分に提供しているか」も、新聞の重要な役割の一つだが、「そう思う」との回答は半数の 50.4% で、「そうは思わない」の 22.1% を大きく上回った。昨年度も「そう思う」48.4% に対して「そうは思わない」の 16.1% を上回ったが、「そう思う」とともに「そうは思わない」も増加しているところは気になるところといえようか。

また、最近問題になっている「プライバシーと人権」については、「気を配っている」と答えたのは 22.9%、「気を配っていない」と答えたのが 45.0% である。昨年度は、「気を配っている」が 19.9%、「気を配っていない」は 40.9% だったから、両者の意見がともに増加した形となった。「気を配っていない」の上昇は、新聞だけでなくメディア全体が抱えている問題の深刻さを深めているといえようか。

6. 読書に関する調査

現在、毎日約 200 点の書籍が新しく出版されているもののうち 4 割は返本されているといわれている。最近では週刊誌よりも月刊誌に人気が高まっているが、雑誌が一般的な書籍の売上げを上回ったのは 1979 年だった。その後も書籍には「ハリーポッター」ものや「バカの壁」など 300 万部を超える超ベストセラーものも出てくるが、概して伸び悩み、特に文芸書などの落ち込みは大きい。「活字離れ」が「読書離れ」を押し進めていることは、「新聞離れ」と相通ずるものがあるといえよう。当然のこととして、学生の「読書離れ」も大きい。

昨年からの 1 年間に読んだ本は今年度の岡山理科大生の調査では、全学平均で 8.5 冊である。1 ヶ月に 1 冊にも満たない。1 年間に 1 冊も読まなかった者は回答者 229 人の 7.9% にもなる。「1 冊も読まなかった」者を除くと 1 年間の平均読書数は 9.2 冊になる。それでも 1 ヶ月 1 冊には満たない。毎日新聞が毎年行っている「読書世論調査」（回答 2812 人）によると単行本、文庫・新書の「書籍」で全体平均で 1 ヶ月 1.5 冊、学生は 3.0 冊になっている。岡山理科大生の読書離れが顕著である。

最近の読書時間では、「ほとんど読まない」という「1 日の読書時間 0 分」の回答が 5 人に 1 人（20.1%）もいる。

表 9 岡山理科大生の読書状況

	この 1 年間の平均読書冊数	最近の読書時間	最近の読書時間は 1 年前に比べると？ (未回答など除き有効回答 210 人)		
			増加	減少	変わらず
全学	8.5 冊	31.9 分	17.1% (増加時間平均 41.6 分)	20.0% (減少時間平均 42.6 分)	62.9%
総合情報学部	9.0 冊	33.2 分	15.1% (同 35.4 分)	22.6% (同 42.4 分)	62.4%
理学部	8.1 冊	33.5 分	9.1% (同 51.3 分)	18.2% (同 27.5 分)	72.7%
工学部	8.0 冊	24.0 分	22.4% (同 44.7 分)	18.8% (同 73.5 分)	58.8%

* 回答 229 人、「読書時間の 1 年前比較」回答は 210 人

表 10 岡山理科大学の過去1年間における読書傾向
単位 %

	全学	総情学部	理学部	工学部
宗教関係書	18.0	13.3	24.2	13.3
歴史書	12.3	16.7	8.8	10.0
科学関係書	15.6	10.0	16.5	30.0
経済関係書	5.7	6.7	4.4	6.7
社会問題書	6.6	8.9	3.3	10.0
政治関係書	2.8	2.2	3.3	3.3
健康関連書	6.6	8.9	5.5	3.3
趣味関連書	40.8	48.9	34.1	36.7
暮らし関連	8.5	5.6	12.1	6.7
日本の小説	64.5	58.9	72.5	56.7
外国の小説	23.7	26.7	19.8	26.7
エッセー	14.7	11.1	20.9	6.7
ノンフィクション	11.8	11.1	13.2	10.0

読書数 0 冊を除く。回答は全学 211 人、総合情報学部（総情学部で表記）90 人、理学部 91 人、工学部 30 人

ような傾向を見せている（表 9）。

読書をジャンル別に見てみると、やはり「日本の小説」が多く、読書数 0 冊を除いた学生では 64.5% を占めていた。続いて多いのが「趣味関連書」の 40.8% だったが、意外なのが 4 位となっている「宗教関係書」（18.0%）だった（表 10）。毎日新聞の調査では、「趣味・スポーツ」がトップで、「健康・医療・福祉」、「暮らし・料理・育児」、「日本の小説」と続いており、一般の人たちにおける「趣味関連書」の根強さが表れていた。

7. まとめ

日本新聞協会の「2003 年全国メディア接触・評価調査」によれば、「情報源として欠かせないものとして、「新聞」58.2%、「テレビ（NHK）」44.5%、「テレビ（民放）」42.6% に次いで「インターネット」が 25.4% を占めており、同じ調査の「情報量が多い」の項目では、「新聞」42.6%、「テレビ（民放）」32.8%、「テレビ（NHK）」27.7% を押さえて「インターネット」が 43.7% でトップに躍り出ている。

今回の調査では、インターネットは気になった媒体の一つだったものの、昨年度との比較を重視してあえて加えなかったのだが、新聞協会のデータを見て、実は後悔をしている。「ニュースへの接点」から考えれば、新聞の一覧性までは行かないまでも、テレビやラジオに比べれば情報に接し易いといえよう。インターネットは新しいニュースが入るたびに項目に追加されていくケースが多く、いわば「速報性があり、情報量も多い」のである。速報性に欠け、紙面というスペースが限られた新聞のマイナス面を十分に埋める。「情報源」として新聞、テレビの後塵を拝するのは、操作の習熟度、または機能が絡んでくるものと考えられるところから、簡単に操作できる機種が安価に増えつつある現状では、その端緒をつかむことは必要だったであろう。

ところで、昨年度に次いで今年度も目に付いたのが、新聞を読まない学生が残す“課題”だ。「活字離れ」は着実に誤字、脱字の世界を拡大しているし、社会に背を向けた生活は、将来の社会不安の到来を暗示する。

「かん防長官」、「管直人」、「三びし」、「白装族」、「親聞」などが何を意味するのかお分かりだろうか。

講義の中でレポートを書いてもらうと、このような表現がいくつも見られる。講義の時間でこのミス黒板に羅列して注意を喚起するのだが、その直後に書いてもらったレポートにもまた同じ間違いをする学生が必ず、それも複数いる。さらにレポートをはじめとして学生が書く文章は徐々にひらがなが主流となってきたように思えてならない。「分からない時には、間違った漢字を書くよりはひらがなで書け」とは言うが、度を超している。またこのひらがな主流の文章でも、漢字を交えると誤字が目立つのである。

学生は文章を読んでいないことは、昨年岡山理科大学、または日本新聞協会や京都の私立大の調査で判明しており、新聞協会が調査した同年代層や京都の私大生に比べて、岡山理科大学生の「活字離れ」が浮き彫りにされているが、その結果がこの誤字の一因であろう。文章も主語、述語が乱れており、なかには文章の体をなしていないものさえ見られる。この「活字離れ」は昨年調査よりも、今年度の調査でさらに悪化してい

この「読書時間 0 分」をも含めて全体の 1 日の平均読書時間を見ると 31.9 分、「読書時間 0 分」を除くと 39.9 分という状況だった。学部別では、工学部が 24.0 分（「読書時間 0 分」を除くと 32.3 分）と他の総合情報学部、理学部に比べて 9 分近く低く、やや読書離れの傾向となっていた。同じく毎日新聞の調査では書籍の平均読書時間は 24 分、「0 分」を除く読書ベースでは 57 分だった。

この読書時間は 1 年前に比べればどうだろうか。回答がはっきりしない 19 人を除いた 210 人の回答は「増加した」が 17.1%、「減少した」20.0% で、大半の 62.9% が「変わらない」だった。「増加した」と回答した学生は 1 日平均で 41.6 分の増加、逆に「減少した」と回答した学生は平均で 42.6 分の減少となっていた。読書時間はやや少なくなっている

るような結果になっている。

「新聞離れ」「活字離れ」はまた、熱しやすく冷めやすい世論、議論をし尽くすことはせずに「現状に容易に納得する」日本人を生み出していないだろうか。

今年の6月16日の毎日新聞（大阪本社発行統合版）の「参院選への視点」で精神科医の香山リカさんは世論を“国民的視野狭窄状態”と表現して「1枚の映像によって目に入った情報だけで、善しあしを判断しているわけで、危険な兆候だと思います」と言っている。「喉元過ぎれば・・・」であり「場当たりの」なのである。

岡山理科大学も同じような反応をする。学生たちとイラクへの自衛隊派遣問題を討議をしていると、「なぜ派遣が問題なのか」は議題の中に入っていない。派遣が論議されていた折の新聞には日々憲法上の問題などが取り上げられていたのだが、テレビでタイトルだけ、または「派遣されるかもしれない」、「派遣された」という事実だけを目にしてニュースを知っているという学生には、極論すれば討論に参加するだけの材料を持ち合わせていないのである。

メディア、なかでも新聞には「権力の監視」という大きな役割がある。テレビでも時折「監視役」としての解説やトーク番組があるが調査からさほど関心が払われているとはいえないし、そのような番組をじっくり見ることは苦手ともいえよう。政治に敏感であるべき若者たち、なかでも学生が社会の流れに関心を払わなければ、将来そのツケは必ず自らに返ってくることを自覚して欲しいと思う。

その意味で、調査は以後も必要だし、学生の「活字回帰」を探ることも必要になる。

今春卒業した学生が「仕事から帰ってテレビで夜10時か11時ごろのニュースを見るが、一つのニュースが長くて全般的な出来事が分からない。新聞だと短時間で全体の流れがつかめるし、時間があれば“なぜ”、“どうして”などと思う記事が読める。新聞がなぜ必要か分かったような気がする」と話していたが、指導していきたいポイントの一つはこの点である。さらなる注意、喚起が必要な事案だけに調査を続行するとともに、他地域の学生をはじめとする若い人たちとの比較をも継続して、警告・提言を繰り返していきたいと考えている。

主な参考文献・資料

- 1) 日本新聞協会：「新聞研究」1993年10月号
- 2) 日本新聞協会：「新聞研究」2001年12月号
- 3) 山本文雄編著：「日本マス・コミュニケーション史 [増補]」東海大学出版会（1996年）
- 4) 毎日新聞社：「20世紀年表」（1997年）
- 5) 門奈直樹著：「ジャーナリズムの科学」有斐閣選書（2001年）
- 6) NHK放送文化研究所監修：「放送の20世紀」NHK出版（2002年）
- 7) NHK放送文化研究所編：「テレビ視聴の50年」NHK出版（2003年）
- 8) 岡村黎明著：「テレビの21世紀」岩波新書（2003年）
- 9) 中村清福著：「新聞は生き残れるか」岩波新書（2003年）
- 10) 徳山喜雄著：「報道危機—リ・ジャーナリズム論」集英社新書（2003年）
- 11) 「毎日新聞大阪本社版」（2003年10月25日朝刊14、15ページ）
- 12) 日本新聞協会：「多メディア時代の新聞力 2003年全国メディア接触・評価調査報告書」（2003年）
- 13) 電通総研編：「2004 情報メディア白書」ダイヤモンド社（2004年）
- 14) 毎日新聞東京本社広告局：「読書世論調査 2004年版」
- 15) NHK放送文化研究所：「放送研究と調査」2004年9月号、NHK出版
- 16) 日本出版学会編著：「白書出版産業」文化通信社（2004年）
- 17) 亘英太郎著：「ジャーナリズム『現』論」世界思想社（2004年）

[補足資料]

補表 1 岡山理科大生が毎日読む紙面

	単位 %								
	1 面	国際 面	経済 面	社会 面	スポーツ 面	家庭 面	文化 学 面	解 説 面	地 域 面
2 全 学	76.4	27.9	18.4	39.7	58.1	10.3	14.0	7.4	36.8
0 総合情報学部	77.0	23.0	17.6	40.5	54.1	9.5	13.5	8.1	39.2
0 理学部	79.1	20.9	23.3	39.5	62.8	0.0	18.6	9.3	34.9
4 工学部	68.4	63.2	10.5	36.8	63.1	0.0	5.3	0.0	31.6
2003年	85.1	35.9	19.3	43.1	59.7	5.5	16.6	4.4	—

* 閲読時間 0 分を除き、よく読む紙面上位 3 ページを回答してもらい集計したが、3 ページなくても回答としてカウントした。04 年と 03 年では質問方法を少し変えたが、03 年を比較のために掲載。回答は 2004 年全学 136 人、総合情報学部 74 人、理学部 43 人、工学部 19 人、2003 年 181 人

補表 2 岡山理科大生が毎日見るテレビ番組

	単位 %								
	ニュース	ドキュメンタリー	トーク	スポーツ	ワイドショー	映画	ドラマ	音楽	バラエティ
2 全 学	64.2	11.1	23.0	41.3	10.2	25.2	35.7	38.7	58.6
0 総合情報学部	63.4	13.9	27.7	36.6	10.9	30.7	31.7	42.6	57.4
0 理学部	70.4	9.2	15.3	46.9	10.2	16.3	45.9	31.6	62.2
4 工学部	50.0	8.3	30.6	38.9	8.3	33.3	19.4	47.2	66.7
2003年	50.3	8.2	20.0	34.5	12.7	24.8	38.2	35.5	50.6

* 視聴時間 0 分を除き、よく見る上位 3 番組を回答してもらい集計したが、3 番組なくても回答としてカウントした。04 年と 03 年では質問方法を少し変えたが、03 年を比較のために掲載。回答は 2004 年全学 235 人、総合情報学部 106 人、理学部 98 人、工学部 36 人、2003 年 330 人

補表 3 岡山理科大生が毎日聴くラジオ番組

	単位 %					
	ニュース	ドキュメンタリー	トーク	スポーツ	音楽	バラエティ
2 全 学	40.0	0.0	48.9	28.9	68.9	28.9
0 総合情報学部	41.7	0.0	62.5	25.0	58.3	33.3
0 理学部	31.3	0.0	37.5	37.5	81.3	25.0
4 工学部	60.0	0.0	20.0	20.0	80.0	20.0
2003年	33.3	2.8	48.6	31.9	73.6	34.7

* 聴取時間 0 分を除き、よく聴く上位 3 番組を回答してもらい集計したが、3 番組なくても回答としてカウントした。04 年と 03 年では質問方法を少し変えたが、03 年を比較のために掲載。回答は 2004 年全学 45 人、総合情報学部 24 人、理学部 16 人、工学部 5 人、2003 年 72 人

Accelerating the decline of newspaper usage and evaluation

— From the follow-up survey for the students of Okayama
University of Science in 2004 —

Kunihiko KIMURA

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received September 27, 2004; accepted November 5, 2004)

Reading newspapers is important for the students to see the social organization. But, recently, the readership is falling down, especially among the youth.

To see the issues, I had a statistical survey on media usage and evaluation for the students of Okayama University of Science last year. I reconfirmed that most of the students didn't know much about the daily news but couldn't write the right sentence, especially KANZI.

I've been given them some advices that newspapers are an indispensable source of information and reading newspapers are winning the abundance of available information. Now, I had the same survey for the students of Okayama University of Science again, and noticed the paper rating advanced further down. I did same survey on books this year and got the similar results that the reading rates are decreasing.

The survey also showed the reliability of press turned around. It pleased me well.